

目次

- ・ 1999年度日本図書館文化史研究会第16回研究集会・総会報告
- ・ 故・高橋重臣先生を偲んで（渡辺信一）
- ・ 研究例会のお知らせ
- ・ 埜上先生の逝去を悼む（石塚栄二）
- ・ 会員動向
- ・ 事務局より

1999年度日本図書館文化史研究会 第16回研究集会報告

第1日 テーマ:「図書館法」(1950)の現代的意義

発表1 図書館法 — 過去・現在・未来

山本 順一

(図書館情報大学)

最近に至り、図書館法制はにわかに激動期を迎えている。学校図書館法が改正(1997年)され、国立国会図書館法も改正(1999年)され、そして‘地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律’(平成11・7・16法律87号)の134条はまた図書館法を改正した。この来年で制定50周年を迎える図書館法の改正は、わが国の社会全体の構造改革の一環として行われたもので、今後展開される競争社会において公共図書館が敗者復活、弱者台頭のため‘安全ネット’のひとつとして機能することが期待されるととらえるべきものだと考える。

図書館法の構成を見ると、司書・司書補の資格、図書館協議会、国庫補助にかかわる諸規定の存在が大きいが、これまで理念法として機能してきた。21世紀の高度情報社会においては、公共図書館を設置、管理、運営する地方公共団体の力量が問われることになり、これまでとは異なるあらたなモデルの登場が期待されるし、図書館人は図書館法の理念を捉え返し、多様な個性派図書館像を模索しなければならない。

## 発表2 図書館法制定過程における CIE 図書館担当官の関与について

三浦 太郎

(東京大学大学院博士課程)

初代図書館担当官キーニーは占領初期の段階で図書館法制定の必要性を主張し、すでに日本側において下地のあった法案作成の動きを活発化させた。キーニーのあとを受けたネルソンは、図書館法の単行化を決定づける指示を与えたほか、CIE の分権化政策と図書館法の規定との整合を図った。第2代担当官バーネットは、図書館協議会委員会の教育委員会からの独立を主張するなど自律的な図書館運営を構想したが、館界との意思疎通を欠いたきらいがある。第3代担当官フェアウェザーとその後を再び引き継いだネルソンによって、国庫補助の無条件交付や義務設置の非現実性が主張され、最終的には、そうした義務規定や中央図書館制度を廃止し、米側の一貫した主張である無料制を規定した図書館法案が、館界によって承諾され国会に上程された。

## 発表3 国立国会図書館の設立と図書館法の成立

中林 隆明

(東洋英和女学院大学)

1950年4月末、図書館法が公布されるが、全国の公共図書館の要の役割を演じる筈の国の中央図書館は、その時点では存在しない。1948年2月公布・施行された国立国会図書館法に基づき国会に設置された国立国会図書館(NDL)が、文部省下にあった国立図書館(旧帝国図書館)を吸収したからである。つまり、1948年時点で、公共図書館を取巻く環境が大きく変化する。

そこで、図書館法と国立国会図書館法の2法の成立過程を、草案作成段階から制定公布までを年表の形で追ってみた。(配布資料：図書館法関連年表(稿)1945-50)両者を成立せしめた当時の社会・教育環境を炙り出すことを狙ったものであるが、中間報告にとどまった。具体的成果を導くためには、現在進行中の東大大学院教育学研究科チーム(代表 根本彰氏)による占領期文書の調査、それに1930年代から40年代の米国図書館界の動き、それらと平行して戦前から戦後に連なる複雑な社会文化環境下の日本公共図書館の実態を分析調査する必要がある。

## 第2日:自由発表

### 発表1:19世紀英国における分析書誌学の展開

— St Bride Printing Library を中心として —

若松 昭子

(慶応義塾大学大学院)

分析書誌学の成立と発展のプロセスを、印刷分野の専門機関であるセントブライド印刷図書館の活動を中心として考察した。その結果、19世紀後半の分析書誌学の草創期において、館は研究者達の学術的コミュニケーション活動を支える中心的存

在の一つとして機能したにもかかわらず、研究分野の発展と共に両者の関連性は希薄になってきたことが分かった。その理由として、歴史的資料の研究から出発した分析書誌学が、その研究対象を拡大するに伴い、近現代の資料へと研究の中心が推移したこと、他方、経済的な制約によって館が収集対象の中心を技術的な資料や印刷流通関連分野へと移行させたことが認められた。

発表2： 1954年「自由宣言」における知る自由の採用

中村 克明

(関東学院大学)

知る自由という言葉がどのような経緯を経て、1954年「自由宣言」に採用されたのかは、今日必ずしも明らかではない。しかし、①1954年「自由宣言」そのものが、逆コースに対する図書館人の危機感を背景に、「国家権力からの自由」を求めて提案されたものであること、②知る権利という言葉を用い、1954年「自由宣言」と同一の内容を述べた意見が図書館人によって同宣言採択以前に提出されていたことなどからすれば、これらの意見に用いられていた知る権利という言葉が日図協事務局により取り上げられ書き改められたのが知る自由であった、ということができないのではないか、と思われる。なお、その意味内容は当時の有山崧氏の論説から判断して、今日同様、受け手の自由であったとみることができるであろう。

発表3： 戦前における図書館員のキャリア形成（中間報告）

山口 源治郎

(東京学芸大学)

本発表は、我が国初の図書館員養成学校である文部省図書館員教習所（1921年開設、のち図書館講習所）の修了者（1期～20期）の進路分析を通して、教習所の果たした客観的役割を明らかにした。教習所は前半期には公共、大学を中心に人材を送っていたが、後半期には公共、大学の比重は急減し、専門図書館および他の職業の比重が高まった。公共の場合地域的な偏りが見られ、関西圏への就職は極わずかである。また帝国図書館では女性修了者が大量に就職するという特徴などが指摘される。

発表4： 図書館令の改正：なかんずく「附帯施設論争」をめぐって

小川 徹

(法政大学)

昭和8年の改正図書館令第一条第二項をめぐって中田邦造と松尾友雄とのあいだで応酬があった。これについて、永末十四雄氏が図書館令改正の意図が図書館人の洞察力が及ばないものであった、とした指摘（『日本公共図書館の形成』1984）を取り上げ、それは、文部省の焦眉の問題となっていた農村経済再生運動における図書館の役割を考えていたこと、そこには文部省が農村型の図書館に主たる関心があったのに、図書館界は概ね都市型の図書館を基礎に発想していたという違いがあっ

たことが根底にあったからと理解するのがよいのではないかと、としたのです。

## 発表5： 1960年代の大田区立図書館

伊藤 峻

(元大田区立蒲田図書館)

1960年代の大田区では、秋岡梧郎氏の指導などを受け、池上（1956年）、洗足池（1960年）、蒲田の3つの図書館を区内に計画的に設置するとともに、日曜開館の実施、自由接架の導入、積極的な貸出しなど、利用者本位の先駆的で積極的なサービスが展開された。蒲田図書館では婦人の本棚、子供の本棚、青年の本棚など、地域に密着したサービスが試みられた。そして、特に注目すべきことは区独自に11名の司書職員を公募により採用したことである。これらのことは今日においても意義深い。

## 1999年度 日本図書館文化史研究会 総会報告

開会にあたり、議長に図書館情報大学の寺田光孝氏を選出した。前年度活動報告と決算報告については、前事務局長中林隆明氏から、活動計画と予算案については、事務局長石井敬三氏から説明を受け、すべて以下の議案の通り承認された。去る3月の臨時総会で保留となっていた代表については、運営委員会の選任した阪田蓉子氏（梅花女子大学）を承認し、監事についても運営委員会の推薦により井上靖代氏（京都外国語大学）、寒川登氏（大阪教育大学附属図書館）を選出した。

### 議案

1. 1998年度報告 別紙参照
  - a. 活動報告
  - b. 会計報告
  
2. 新役員体制について
  - a. 研究会代表  
新代表：阪田蓉子氏（梅花女子大学）
  - b. 監事  
井上靖代氏（京都外国語大学）  
寒川登氏（大阪教育大学附属図書館）
  
3. 1999年度活動計画（案）
  - a. 1999年度活動計画案
    - ①機関誌『図書館文化史研究』No.16（1999）の編集・刊行  
1999年12月刊行を目指す

- ②『ニューズレター』の編集・刊行 (No. 68-71の4回、No. 68-69は刊行済)  
 ③第16回研究集会・総会 (東京) の開催 (1999. 9.11-12)  
 ④研究例会の開催  
     従来からの関東地区での開催は年3回を予定 (第1回は6.19開催済)  
     関西地区においても、随時開催してゆきたい。(第1回は6.18開催済)  
 ⑤運営委員会の開催 (年4回程度)  
     第1回は、6.5開催済  
 b. 1999年度予算案 (1999. 4～2000. 3) 別紙参照

## 事務局報告

1999年9月10現在 会員数140名 (4月以降7名入会、1名退会)  
 1999年度会費納入状況  
 次年度研究集会・総会開催地について  
 会員名簿について (E-mail アドレス、FAX 番号) ご意見をお寄せください。

## 日本図書館文化史研究会1999会計年度決算報告(1998. 4-99. 3)

### [一般会計]

#### 収入の部

前年度繰越金(1999. 4. 8)		149, 316.
郵便局普通預金利子(1999. 4. 1)		224.
会費 (年会費3000円) 納入 (振替)		476, 000.
内訳		
1996年度分	1人	3, 000.
1997年度分	19	57, 000.
納入不足	1	2, 000. (後日納入分)
1998年度分	127	381, 000.
1999年度分	8	24, 000.
2000年度分	3	9, 000.
総計		¥625, 540.

#### 支出の部

事務局費	30, 130.
ニューズレター (No. 64-67)	101, 900.
機関誌編集・刊行費	229, 430.
小計	(361, 460).
積立金 (特別会計繰込み)	50, 000.
次年度繰越金	214, 080.
総計	¥625, 540.

[特別会計：20周年記念事業積立金]

前年度(96)繰越金	500,000.
1998年度積立金	50,000.
<u>総計</u>	<u>¥550,000.</u>

監査報告

1998年度の監査の結果、帳簿の記入、事務処理が適正に行われていたことを報告します。

1999年4月30日

監事 池田政弘 印

監事 塩田一徳 印

日本図書館文化史研究会1999年度予算案

[一般会計]

収入の部

会費	390,000.	1999年度分 (3,000円×130人)
雑費	300.	
前年度繰越金	214,080.	
<u>総計</u>	<u>604,380.</u>	

支出の部

事務局費	60,000.	
会議費	10,000.	
消耗品費	15,000.	
通信費	25,000.	
交通費	10,000.	
ニューズレター	130,000.	
編集発行費	75,000.	年4回
送料	55,000.	
機関誌刊行費	230,000.	『図書館文化史研究』No. 16
編集費	50,000.	入力作業等を含む
発行費用	150,000.	買い取り費用を含む
抜刷費用	30,000.	委託送料を含む
研究会運営費	36,000.	
研究集会・総会	15,000.	第16回研究集会関係費

研究例会	11,000.	関東及び関西で年3回+α
運営委員会	10,000.	年4回程度
積立金(特別会計)	50,000.	
予備費	98,380.	事務局移転費を含む
<u>総計</u>	<u>604,380.</u>	

[特別会計：20周年記念事業積立金(1982-2002)]

1996-98年度積立金	550,000.
1999年度	50,000.
<u>総計</u>	<u>550,000.</u>

日本図書館文化史研究会 1998年度活動報告(1998.4-99.3)

1. 第15回研究集会・総会の開催 参照：『ニューズレター』66(1998.11)  
 日時 1998.9.20(日)13:00 ~ 21(月)15:00  
 会場 京大会館  
 臨時総会・研究発表の開催 参照：『ニューズレター』68(1999.5)  
 日時 1999.3.13(土)13:00~15:30  
 会場 京大会館  
 13:00~14:00(研究発表) 石塚栄二(帝塚山大学)：「中小レポート」と関西図書館界  
 14:00~15:30 臨時総会 次期運営委員会の発足と事務局の関西地区移動について  
 1999年度から石井敬三(大阪府立大学総合情報センター)を事務局長とする運営委員会(石井、川崎、工藤、深井、阪田、小黑)が発足  
 なお、次期代表決定まで臨時措置として小川・現代表が代行
2. 機関誌『図書館文化史研究』15(1998.9)刊行  
 抜刷は各執筆者に約25部提供。なお、印刷・製本費として1部210円程度、合計約21,000円を要します。
3. 会報『ニューズレター』の編集刊行  
 No.64(1998.5) 65(1998.8) 66(1998.11) 67(1999.2)
4. 研究例会  
 (1)1998.6.20(国立国会図書館) 参照：『ニューズレター』65(1998.8)  
 石山 洋：日本における博物館および図書館の創設期 一町田久成の国立博物館設

立活動をめぐって—

小川徹：永嶺重敏の近年の論考 — 「黙読の〈制度化〉」

出席者 13名

(2)1998. 12. 19(国立国会図書館) 参照：『ニューズレター』67(1999. 2)

山本順一：内側から見たアメリカ議会図書館

中林隆明：ランガナータンの来日について

出席者 8名

(3)1999. 3. 13の臨時総会・研究発表(石塚栄二氏)開催により休止

#### 5. 運営委員会の開催

(1)1998. 6. 20(土)国立国会図書館 (2)98. 9. 21(月)京大会館 (3)98. 12. 19(土)国立国会図書館 (4)99. 3. 13(土)京大会館

#### 6. 「都立日比谷図書館の廃館を許さず、改築の予算措置を求める要請書」(アピール)賛同の件

東京都区職労教育庁支部日比谷分会の要請に応じて、趣旨賛同団体の一員に名を連ねました。賛同者は、1998年11月現在で、267団体、個人8,388名です。時間的制約があり、各運営委員と電話協議の結果、小川代表名で要請書に署名し、1999年3月13日の臨時総会で事後了承を得ることとしました。よろしくご了承ください。

これは1957年10月に新築の都立日比谷図書館が施設老朽化に伴い、同館を1999年12月に閉館、改築し、2003年に新館開館を予定していましたが、ご存知の東京都の予算逼迫の影響で改築中止・廃館(1999. 12予定)の方針が東京都教育庁から示されました。当アピールは、これに対するもので、詳細は『図書館雑誌』1998年11-12月号、および99年1月号にあります。

#### 7. その他

会員数は、99年3月末日現在で134名です。現時点での、納入者、未納入者の状況は、下記のとおりです。

会費	納入者	未納入者	会員(計)
97年度(1997. 4—98. 3)	127名(98. 4%)	2名(1. 6%)	129名(100)
98年度(1998. 4—99. 3)	129名(94. 2%)	8名(5. 8%)	137名(100)
99年度(1999. 4—2000. 3)	9名		
2000年度(2000. 4—2001. 3)	3名		



## 故・高橋重臣先生を偲んで

渡辺 信一

(同志社大学文学部)

高橋重臣（しげおみ）先生は、去る5月24日に急逝された。享年76歳であった。“老いの淋しさも、病いの苦しきもほんの少し味わって永眠いたしました。高橋らしい余りの早さに信じられぬまま...”と走り書きされた雍子令夫人のお手紙の行間から、先生のご臨終の様子をうかがい知るに及び、ひとしお哀悼の念を禁じ得ない。

先生との出会いは、今から28年前の1971年の夏、米国の首都ワシントンで議会図書館などの見学の途次、突然、お会いした頃から始まる。当時、私は連邦政府のスカラシップを得てライブラリースクールを修了したあと、同じ奨学金によるフィールドスタディで米国本土の主たる図書館の視察をしてまわり、東海岸はほぼ最終目的地であった。

高橋先生は、当時、天理大学教授の職にあつてかなり広範囲にわたり、欧米の旅を重ねておられた。このときは、夏休みということもあつてご令嬢とご子息も同行しておられ、訪れた先の図書館長に、“My daughter, Mary and my son, George.”といった具合に真理さん、浄司君のお二人のお名前を英語風にご紹介されていた。先生は稀覯本の宝庫、天理図書館にお勤めになった関係で、書物の歴史や印刷史にご造詣が深く、行く先々で貴重書庫を訪れ、ヴェラム刷りの『四十二行聖書』だとか、彩色写本だとか、熱心にご覧になり、ワシントンからの行き帰りに長距離バスの中で、訪問先の rare book collection について熱を込めてお話してくださった。

私が帰国後、図書館学の一教師となつてから天理の高橋邸や熱海の“別荘”で泊めていただいたが、先生の話は、ピエール・モルガン図書館のコレクションであったり、竣工したばかりのメトロポリタン・トロント図書館の内部を流れるせせらぎであったり、フィレンツェ国立図書館のインキュナブラであったり、といった具合に先生はワイングラスを片手に夜の更けるのも忘れて熱弁をふるわれた。（それらは、先生のご編集による（天理大学図書館学研究室年報・芸亭会報）『芸亭』の第3巻以降、「欧米/北欧図書館の旅」の記事として連載されている。）

先生は、1942年3月に旧制・福岡高等学校（文科乙類）をご卒業後、同年4月に東京帝国大学文学部独逸文学科にご入学のあと、1944年9月に戦時中の繰り上げ卒業で海軍予備学生/士官に任官された。戦後、1946年4月から7年間、天理図書館司書をなさったあと、同大学の教員となられ、1956年4月から二十数年以上にわたり天理大学教授をされていたが、1984年4月に請われて図書館情報大学教授にご就任に

なり、4年間、つくばの地で研究・教育の責を果たされた。

同志社大学へのご出講は、図書館情報大学を定年でお辞めになった、1988年の春から5年間にわたり、小倉親雄・青木次彦両先生のあとの「図書館史」を、森耕一先生のあとの「図書館学特論（西洋図書館史）」を、また或る年は、岩猿敏生先生と「図書館情報学IV（人文・社会科学の書誌解題）」をご担当くださり、学生に対しても多大の薫陶を与えてくださった。

また私個人としても先生が日本図書館研究会の理事/事務局長をしておられた関係で、理事会の折りなど、少なからぬご指導をたまわった。なかでも先生のご尽力で1972年に結成された図書館学教育研究グループは、当時、全国で「改善試案」をめぐる論議がきわめて激しく、また日図研の財政が未曾有の危機の状態に瀕した困難な中で養成教育/研究者の結束をはかられた。先生の御蔭で、関西が中心ではあるが、われわれの結束がはかれ、同研究グループの活動は現在も続けられている。

先生はかつての海軍士官として山村 聡を思わせる苦み走った容貌と、きびきびとしてさっそうたる先生のお姿が今も臉から消え去ることは、ない。限られた紙面ではとても先生のご生前の業績や人となりをご紹介することは至難のわざとも言うべきであろう。ただひたすらに先生のご冥福をお祈りするのみである。合掌。

---

~~~~~ 関東地区研究例会(1999年度第2回) ~~~~~

日時：12.18・土 14-16時

場所：国立国会図書館・サークル室（本館6階西側。西口1階エレベータで6階まで）

発表 古賀崇：アメリカ政府印刷局をめぐる歴史 —第一次大戦期ニューディール期を中心に—

山口源治郎：[書評] 小柳屯『木造図書館の時代』（福岡 石風社 1999）

小川 徹：[文献紹介] 坂本龍三『岡本健蔵伝』（講談社出版サービスセンター 1998）

注) 小柳屯氏 大牟田市立図書館長を1991年3月に退職

岡本健蔵氏 (1883.8-1944.12) 元市立函館図書館長

坂本龍三氏 現在、北広島市立図書館長

\*関西地区で発表希望される方は事務局へご連絡ください。ご相談の上、研究会を企画します。

## 埜上先生の逝去を悼む

石塚 栄二  
(帝塚山大学)

9月12日、埜上先生が逝去された。同氏が昭和27年京都府立図書館に就職されて間もなく、当時同館に在職しておられた藤田善一さんの紹介で知り合ってから、45年を越える交友を想い、格別の寂しさを禁じえない。

先生には、岡崎の府立図書館、下鴨の総合資料館、近畿大学の時代を通じて、整理技術、図書館史の分野に限らず、さまざまな教示に与ったばかりでなく、私的にもほんとうのお世話になった。図書館以外の分野にうとい私に、歴史や文献資料、博物館資料の面などにわたって、いろいろな知識を提供してくださり、広い観点からの図書館の見方を指示してくださった。昭和50年代に入ってから、私が関係していた件名標目委員会に参加してくださり、約20年間熱心に件名標目表改訂のしごとに尽力していただいた。特に、後半委員長としてBSH第4版の改訂の基礎を築いてくださったことは、図書館界にとって大きな貢献であった。ご健康の都合で途中退任されたが、後を引き継いだ私にとっては感謝の言葉もない。

先生は、名古屋大学大学院に日本史の専攻が設置されたときに初期の院生として進学された経歴からして、図書館史には関心が深く、「江戸時代における図書館の一例——司馬江漢を主として——」（図書館学とその周辺）「明治期の公共図書館」（赤松俊秀教授退官記念国史論集）「大正期の公共図書館」（名古屋大学日本史論集）「江戸時代の塾などの図書館」（柴田実先生古希記念日本文化史論叢）「田中不二麻呂の前半生と西洋」（日本洋学史の研究6）など、図書館界以外の出版物にも、健筆を揮われ、図書館史への歴史学界の関心を呼び起こすことに努められた。

その一方では、京都市図書館の委託問題で住民運動の先頭に立たれるなど、実践活動の分野でも活躍され、実証的で粘り強い性格を活かして、多くのひとびとの信頼を得ておられた。控えめでありながら、信ずることには一歩も引かない芯の強さは、同氏の長い研究生生活から形成されたものであったといえようか。

同氏の書物に対する愛惜の念は深く、大量の蔵書を倉庫会社に預けておられたと聞く。図書館史に限らず出版史の分野にも役立つ、そのご蔵書を活かす道はないものか。京都の関係者の方々のご考慮を願いたいと考える。それも、同氏のこれまでの業績を活かすひとつの方策であろう。

同氏の安らかなご冥福を祈って、自らの寂しさをまぎらすよすがとしたい。

---

### 前ページ関東地区研究例会の[文献紹介]について続報追加

なお、本書は、限定出版のため入手が難しいとのこと。幸い、著者の坂本氏から小冊子『「岡田健蔵伝」への試み』（136p. 初出：北海道武蔵女子短期大学紀要29号）を若干部数受贈。

『岡田健蔵伝 第一部』は、この「試み」を加筆訂正したもの。研究例会出席予定で、希望される方は、小川までご連絡下さい（事前送付のため）。

宛先：

## 原稿募集

- ◇『図書館文化史研究』17号（2000年9月刊行予定）の原稿を募集します。原稿の締切は2000年3月31日です。投稿を予定される方は事務局までご一報ください。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。
- ◇「ニューズレター」の原稿を募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局（石井）あてお送りください。

## 会員動向

### 新入会員

### 住所変更

### 事務局から

第16回研究集会は、のべ33名の参加者があり盛会でした。各発表の要旨は本文掲載の通りです。徴収した参加費は資料のコピーに使用しましたが、13,000円の残金が出ました。また懇親会の会計にも極わずかの残金があり2次会の残金と併せて7,236円の残金が生じました。合計20,236円の残金は、当研究会の一般会計に寄付として繰り入れさせていただきますのでご了承ください。

◇今年度の会費納入がまだの方、振込よろしくお願ひします。会費は年3,000円です。住所変更、異動等ありましたら振込用紙の「通信欄」にご記入ください。

◇刊行が少し遅れています機関誌「図書館文化史研究」16号は、年末に刊行予定で作業が進んでいます。お手元に届くのは、2000年1月の初・中旬になると思われまゝ。内容は「清水正三先生、浪江虔先生追悼」の特集他となっています。ご期待ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三